

【全体概要】

露地ナシ栽培は化学農薬に依存した病害虫防除体系だが、ハダニ類の薬剤感受性低下及び黒星病の多発によりIPMの必要性が高まった。黒星病は落葉処理による耕種的防除、ハダニ類は天敵農薬による生物的防除を農薬による化学的防除と組み合わせ、愛知県の露地ナシ栽培に適合した総合防除体系を確立し技術導入を支援する。

新品種・新技術等の概要

越冬伝染源の罹病落葉を除去

ナシの最重要病害である黒星病は、春先の連続降雨により防除適期を逃し発病する。一次伝染源である前年罹病落葉を除去して、確実に病原菌密度を低下させる。



天敵農薬によるハダニ類の防除

化学合成農薬の感受性低下が最も著しいハダニ類を、天敵であるカブリダニによる捕食で密度抑制し、被害を低減する。



主な取組内容

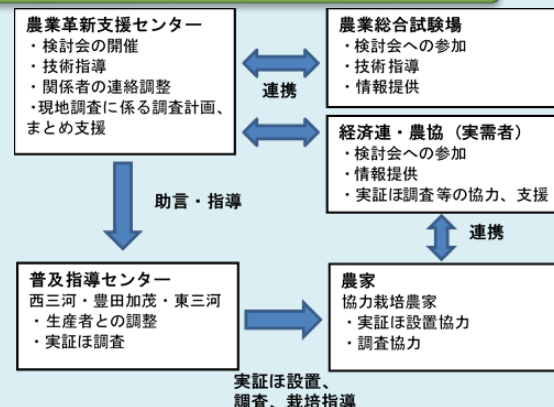
プロワにより落葉をほ場の端に集めて、ほ場外から除去

ナシ生育期の4月から収穫期まで経時的に発病を調査し、落葉除去の効果を慣行区と比較したところ、葉では無処理区の発病が少なく効果が不明確だが、果実では発病に差があり処理効果が確認できた。

天敵農薬によるハダニ類の防除

5月に天敵農薬（ミヤコカブリダニ剤）を樹幹に設置、6月にも追加設置、ナシ葉のハダニ類とカブリダニ類の生息数を5月から8月まで経時的に調査し、ハダニ類の密度抑制効果を慣行区と比較したところ、倍量設置区でハダニ類の発生を抑制できた。

実施体制図



農業革新支援センターが調整し、普及指導センター、県試験研究機関、経済連、農協、生産者と連携を図りながら、事業の調整・進行管理を行う。

課題と今後の対応

黒星病

果実では、処理区と無処理区の発病に差があり処理効果を確認できたが、薬剤防除の徹底により葉では無処理区の発病が少なく、効果が不明確であった。

ハダニ類

倍量設置区で発生を抑制できたが、通常量設置区ではハダニ類がかなり発生したため、化学農薬によるレスキュー防除が必要であった。

今後の対応

ハダニ類、黒星病ともに単年度の結果では普及性にかけるため、一部ほ場を変更して再試験を行う。ハダニ類は天敵農薬の通常量設置を西三河の同一ほ場で、黒星病は豊田と豊橋でそれぞれ前年多発ほ場で2年目の試験を実施する。